

こころみ



2007.12.21 担当：教頭会

= 基礎・基本を身に付ける授業過程 =
 ~ 授業力を高める発問について考える ~

発問について

授業を進めていく上で、発問はねらいを達成させる、授業の良し悪しに関わるもので、教師と子どものコミュニケーションによって成立する大切なものです。

発問というと、教師から発せられる問いだけを考えがちですが、それを受けて子どもが自身自身に問いを発すること（自問自答）も忘れてはなりません。したがって、教師の発問は、子どもの心を揺さぶり、自己課題を見付け、方向性を決定づける価値あるものでなければいけません。そして、教師と子どもの問いの連続によって、ねらいが達成されていきます。

こんな発問していませんか？

教師が準備している答えを子どもに答えてもらうための「答え探しゲーム」のような一問一答的な発問
 ひらめきの速い子だけを取り上げ、一部の子どもの発言だけで授業を進める発問
 分かりきったことを延々と聞く発問
 長々としていて明確でない、言う度に言葉が微妙に変化する、答えられない発問
 いちいち子どもの答えに反応しすぎていく、その場で思いついたような筋から外れた発問

よい発問の条件とは？

子どもが能力に応じて答えられるもの
 対立矛盾するものも含めて、様々な考えがでるもの
 子どもの思考に緊張感をつくるもの
 教材の本質と結び付き、みんなが解決しようと努められるもの
 子どもの答えを予想し得るもの



発問について考える（学習展開例・実践例より）

学習展開例1 小5年国語 人物の考え方や生き方をとらえよう「わらぐつの中の神様」	
学習活動と予想される児童の反応	（教師の発問と）子どもの自問自答
1 学習活動表をもとに、学習課題と方法を確認する。	(教) 学習活動表をもとに前時までの振り返り（ <u>学習事項を想起させる発問</u> ） (子) 「前の時間は を学習した。今日は？」 「二人のことが分かってきた。詳しく学習しよう。」
なぜ、大工さんはおみつさんに「およめにきてほしい」と思ったのだろうか。 ・予想される児童の反応	(教) 学習課題の提示（ <u>課題を自覚させる発問</u> ） (子) 「おみつさんはわらぐつを心をこめて作っていたなあ。」「教科書に線を引いたなあ。」

(以下、略)	(教) 「おみつさんと大工さんの人物像はどうでしたか。」(課題解決を方向付ける発問) (子) 「おみつさんは、...。」「大工さんは、...。」
--------	---

導入部分だけですが、大切な発問が3つ盛り込まれていました。研究授業ということもあり、指導案には、予想される児童の反応が記述されていて、学習活動・教師の支援では何を何でどうするのかを具体的に明示することにより、発問も焦点化されていました。

学習活動	(教師の発問と(子)どもの自問自答)
1 問題をつかみ、立式する。	
2 めあてを確かめる。	(教) めあての提示(課題を自覚させる発問)
20 ÷ 5 の答えの見つけ方を考えよう。	(子) 「1こずつ5人に分けていけばよい。」「さらに分けていくとできそう。」
3 答えの見つけ方を考える。	(教) 「前の時間に学習したこと、図や式で見つけ方を考えられないかな。」(学習方法を決める発問) 「1つの方法を考えたら他の方法も考えてみよう。」(思考を広げる発問)
4 考えを発表し、よりよい見つけ方について知る。	(子) 「ぼくの考えに似ている。」「あんな方法もあるんだ。」「あの方法が分かりやすい。」 (教) 「速く正しく見つけることができるのはこの方法でしょう。」(学習の核心に迫る発問) (子) 「A君の考えがかけ算ですぐ求められる。」「5のだんの九九を使うと分かりやすい。」
(以下、略)	

3の実際に考える場面では個に対して、4の活動では全体に対しての発問になり、課題解決に向けた適切な言葉を選ばなければいけません。4の活動では、子どもの発言をどう受けとめて扱うのが大切で、学習を深めその本質に迫るためのポイントになります。

学習実践例1 中2年国語 題材「走れメロス」
ねらい：登場人物の考え方の変化をとらえ直しながら、メロスの「走る目的」について自分の考え方もつことができる。
「説明」「発問」「指示」を明確に
説明 メロスはここまでたくさんの苦難を乗り越えて走り続けてきましたね。
発問 メロスは何のために走り続けたのだろうか。
指示 文章に線を引いてから、プリントに書きなさい。

教師が準備した発問と同じ疑問がでてくるような生徒を育てたいものです。そのために日頃から教師が思考や論議を活性化させる発問をしてみせることです。思考を余儀なくさせる十分吟味された発問や、出された意見に対しての切り返し発問など、練り合い、深め合い、高め合う発問を工夫し続けたいものです。

終わりに

実際に研究授業では、指導案の中で子どもの予想される反応と合わせ、発問が考えられていきます。主な発問については、明記されますが、発問と発問、発問と活動を結ぶ補助発問については表記されることはほとんどありません。しかし、問いの連続の大切な役目である補助発問については、子どもの実態、学習の状況を見ながら十分に吟味する必要があります。普段の授業では指導案はないにしろ、学習計画(略案)で発問をどうするのかを意識して取り組むことが、基礎・基本の定着、そして、授業力向上につながっていくものと思います。